

【教育目標】 英知の風かおり 友愛の情ふかく 精励の志つねに



中野だより

平成30年 9月21日 発行 第5号 発行者:中野区立中野中学校

甲子園の土

今年、全国高校野球選手権大会は「100回目の夏」を迎えた。記録的な酷暑にもかかわらず、甲子園球場への来場者は史上初の100万人を突破し、大変な盛り上がりを見せた。夏休み明け全校集会では、同大会で準優勝した秋田県立金足農業、及び準々決勝で同校にサヨナラ2ランスクイズで敗れた近江高校にちなんだ話をした。

甲子園では敗れたチームの選手が涙を流しながら甲子園の土を袋に入れる光景を目にする。しかし、今年、金足農業に敗れた近江校の選手たちにはそんな悲壮感はなかった。

試合後、彼らは「甲子園ありがとう!」「高校野球最高や!」と言いながら、また、「あれがプロやな!」「あいつ、半端ないで!」と対戦した金足農吉田投手を称えながら土をかき集め、用意してきた袋に入れていた。



ウィキペディアより

阪神タイガースで活躍した赤星憲広氏は、高校野球の思い出として「1993年のセンバツ大会で、初めて踏んだ甲子園のふかふかの黒土の感触が忘れられない」と述べていた。

甲子園球場の管理は、1968年から阪神園芸という会社が担当している。野球等が開催されない時期には内野を耕運機で30cm程掘り起こし、ゆっくり転圧しながら理想の「弾力のある土」に仕上げる。球場は黒土だけだと固まりすぎて水はけが悪く、ボールはイレギュラーバウンドする。そこで黒土に砂を混ぜる。砂が多過ぎると水はけは良くなるが、ボールが弾けない。同社は試行錯誤しながら黒土と砂の理想の調合割合を決定していった。その割合は季節や天候によっても変わる。春は砂を多めに、夏はボールが見えやすい様に黒土を多めにブレンドする。黒土は鹿児島、岡山、鳥取、大分、砂は中国福建省の白砂をブレンドしている。

甲子園の土は雨や風で失われた分や、球児が持ち帰って不足した分は補充されるが、土の入れ替えは一度も行われていない。球場が創設された94年前の土も、戦時中に焼夷弾の炎で焦げた土も、引き分け再試合を戦った球児たちの汗や涙を含んだ土も混じって今日までつながっている。一方、中学校は4月に1年生が入学し、翌3月に3年生が卒業するように、毎年3分の1程度の生徒が入れ替わりながら自校の歴史と伝統をつないでいる。

だが、学校には時が流れても変わらないものもある。その一つに「校歌」が挙げられる。今夏の甲子園大会で金足農業の選手たちが、全員体をのけ反らせながら全力で校歌を歌う姿に胸を打たれた人も多い。私はあの光景を見ながら、地域広報誌の「どんな学校にしたいですか」の質問に、「大きな声で校歌が歌われる学校」と答えたことを思い出していた。

♪ 讃えよ 讃えよ 誇れる仲間達
♪ 中野中学 わが母校

金沢智恵子さん作詞、橋本祥路さん作曲による中野中学校歌。素敵な校歌である。